

シンポジウム関連記事

『京都新聞』2010年2月5日(金)

2010年(平成22年)2月5日 金曜日

文化

日本語での創作について語る(左から)田、ネザマフイ、ポヤン
ヒシコ、織の4氏(京都西京区・国際日本文化研究センター)



「越境者文学」の今後は…

日本語を母語としない外国人作家が、時に日本文化の移りかたの可能性を
示し、シボム「日本語を書く」(創作の裏面)を、1月、京都府京
都の国際日本文化研究センターで、研究者を交えて、研究発表を
行なった。

外国人作家ら日文研でシンポ

近年、米田由里の「人」のボヤンヒシコ(中国
)、比叡氏や中国の橋本、内モンゴル語話者の
氏らが相次いで主要文壇に注目を浴び、
文学界に輝き、外国人作家の存在感が増している。

■国際日本文化研究センター

日本語を母語としない外国人作家が、時に日本文化の移りかたの可能性を
示し、シボム「日本語を書く」(創作の裏面)を、1月、京都府京
都の国際日本文化研究センターで、研究者を交えて、研究発表を
行なった。

日本語の表現広げる可能性

日本語を母語としない外国人作家が、時に日本文化の移りかたの可能性を
示し、シボム「日本語を書く」(創作の裏面)を、1月、京都府京
都の国際日本文化研究センターで、研究者を交えて、研究発表を
行なった。

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

も、詩で始まったが、
えて書く、そして小説
が「越境者」になると、日本
人作家から言われると、
進んだ。進んで、「日米
のあいまいな日本語」
に近づいた。多くは、
が「越境者文学」とい
時に日本語の文化と
な差を埋めていく。
指図した。

ネザマフイ氏は「日
」は、その間の使分け
は、新しいことになり
も、文化に近づいて
、間には、文化をその
主観、学者と建築家
歴史を計算が必要だ、
作家や作家は、
夕、詩が大衆、最初が
全体が広がる。その中
に、作家が、
「越境者」の、
けた。日米の
「越境者文学」は、
は、「越境者」は、
ち、その間には、
境に近づいた。その
言葉を、空気が、
も、空気が、
中で、空気が、
作での、
スタイルで、
また、
の、
、
、
、
、
、

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

■「越境者文学」

日 一 期 日 日 日 (夕刊) 第3報時局特別付



難しいけれど…

日本語で書く喜び

外国人作家招きシンポ

日本語で書くようになった外国人作家は、日本語を愛用するようになった。その喜びを、外国人作家たちが語る。左から田原さん、シリィン、メサマフィさん、ボヤンヒシグさん、植木雄さん。京都市京山区。

あいまいさ魅力／おずおず使う

「日本語は、コミュニケーションの重要なツール。日本語を学ぶことは、ただの言語学習ではなく、文化の理解と交流の機会である。日本語の魅力を、外国人作家たちが語る。おずおず使う、あいまいさ魅力。」

日本語を愛用するようになった外国人作家は、日本語を愛用するようになった。その喜びを、外国人作家たちが語る。左から田原さん、シリィン、メサマフィさん、ボヤンヒシグさん、植木雄さん。京都市京山区。

「日本語は、コミュニケーションの重要なツール。日本語を学ぶことは、ただの言語学習ではなく、文化の理解と交流の機会である。日本語の魅力を、外国人作家たちが語る。おずおず使う、あいまいさ魅力。」

「日本語は、コミュニケーションの重要なツール。日本語を学ぶことは、ただの言語学習ではなく、文化の理解と交流の機会である。日本語の魅力を、外国人作家たちが語る。おずおず使う、あいまいさ魅力。」

『東奥新聞』2010年2月27日(土)



シンポジウムに出席した(左から)田原さん、シリィン・ネザマフイさん、ホアン・ミン・ホアンさん、橋本さん

日本文学を異化、活性化

京都・日文研シンポジウム

芥川賞作家の橋本や文学界新人賞を受賞したシリィン・ネザマフイら、日本文学を母国で学び、外国で日本文学を書いた小説家たちが集った。彼らの作品は、日本の文化や社会を異文化の視点から捉え、海外で読者に受け入れられるよう工夫されている。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

注目される「越境作家」

日本作家。シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さん。彼らは、母国で日本文学を学び、外国で日本文学を書いた。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さん。彼らは、母国で日本文学を学び、外国で日本文学を書いた。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。



多和田葉子さん



リービ英雄さん



橋本さん

新しい表現

シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さん。彼らは、母国で日本文学を学び、外国で日本文学を書いた。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さん。彼らは、母国で日本文学を学び、外国で日本文学を書いた。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さん。彼らは、母国で日本文学を学び、外国で日本文学を書いた。このシンポジウムで、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

実作者の見方
昨午、白紙で文芸界新人賞を受賞したシリィン・ネザマフイは、在日作家として、日本文学を異文化で書くことの喜びと苦しみについて、シリィン・ネザマフイ、ホアン・ミン・ホアン、田原さん、橋本さんが語り合った。

(敬称略)

越境する作家の可能性を探る

日文研シンポ「日本語で書く一文学創作の喜びと苦しみ」

芥川賞作家の楊逸や文学界新人賞を受賞したシン・ネザムフィ、日本語を母語としない外国人が日本語で書いた小説や詩が脚光を浴びている。彼らの作品はどのような生まれ、日本文学や日本語とどうかかわっているのか。京都市の国際日本文化研究センター(日文研)が開いたシンポジウム「日本語で書く一文学創作の喜びと苦しみ」では、その可能性に注目し、期待する声が上がった。

× 日本語作家、米アリントンストン大教授の牧野成一は彼らをそう呼び、「日本語を、ソト、から見ることができて、日本語を異化できる人たち」と位

知りたい！文学

置けた。そのような存国としての牧野は、在日韓人の作家や、ドイツに住み、ドイツ語と日本語の両方で小説を書く多和田葉子も加えた。

牧野は、英語、日本語、中国語に通じるリービ英誰の小説を分析。「日人優越」という言葉にポイント・スプレマシー「日本」にはルーベンといっ



楊逸さん

日本文学を異化し活性化

た形で、英語や中国語のルビとを頻りに振っていることなどを挙げ「小説の主人公の心理活動はリビに限りなく近く、一つ一つが越境のステップ」だと語る。こうした「日本語の異化作用」のフロ

の谷口幸代。芥川賞受賞作「一時が凌む朝」の中の「西北風を飲む暮らし」など、中国語の慣用語を作品に導入したと思われること注目し、「母語とのなれ合いから解放された、新しい表現の地平を切り開く可能性が秘められている」と述べた。

シンポの後半には、外国作家らが意見交換した。中国出身の仙台市住い詩人、翻訳家の田原は、もし谷川俊太郎の詩を翻訳しなかったら、日本語で詩を書くことはな



リービ英誰 リン



多和田葉子さん

実作者の見方

シンポウム日本語で書く一文学創作の喜びと苦しみ(左から)田原さゆり、シン・ネザムフィ、楊逸、多和田葉子



「文法は難しい」としつつも、日本語とどうかわれるか、日本語とは何か、日本文学とは何かという疑問を、日本社会に突きつけている」と指摘した。

発言者の認識は、日本社会の閉鎖性を問うことも含め、彼らの存在が日本文化や文学を豊かなものにしているという点で共通していた。

中国出身の作家で弘前大講師の楊天囃は「ラジオで文学の朗読を聞くのが好きで、そのトーンやリズム、声の中に入っている感情の表し方が僕の中に残っていた。後に日本語の文章を書くときに影響を与えたのだと思う」と経験を語った。

日本語を母語としない人たちが日本語が影響を与え、そこから生まれた日本語作品によって日本語と日本文学が揺さぶられ、活性化する。そんな構図が浮かび上がった。(敬称略)

文化

学に新しい血液を注入し、活性化と多様化の大きな可能性になっていると万認した。

新しい表現

場について発表したのは名古屋市立大准教授

か、日本語とは何か、日本文学とは何かという疑問を、日本社会に突きつけている」と指摘した。

文法は難しい」としつつも、日本語とどうかわれるか、日本語とは何か、日本文学とは何かという疑問を、日本社会に突きつけている」と指摘した。

中国出身の作家で弘前大講師の楊天囃は「ラジオで文学の朗読を聞くのが好きで、そのトーンやリズム、声の中に入っている感情の表し方が僕の中に残っていた。後に日本語の文章を書くときに影響を与えたのだと思う」と経験を語った。

『熊本日日新聞』2010年3月1日(月)

日 本 文 学

(第3種郵便物認可)

日本文学を異化

シンポジウム 外国人作家の意義探る

芥川賞作家の絶望や文学界新人賞を受賞したシリィン・ネザマフィら、日本語を母語としない外国人が日本語で書いた小説や詩が脚光を浴びている。彼らの作品はどのように生まれ、日本文学と日本語とをどうかわかっているのか。京都市の国際日本文化研究センター「日文化研」が開いたシンポジウム「日本語で書く―文学創作の喜びと活しきみ―」では、その可能性に注目し、期待すまきが上がった。



日本語作家。米アリン ストン大教授の牧野成一は彼らをもっと呼び、「日本語を、ソト」から見ることできて、日本語を異化できる人たちが」と位置付けた。そのような存在として牧野は、在日韓国人の作家やドイツに住み、ドイツ語と日本語の両方で小説を書く多和田聖子らも加えた。牧野は、英語、日本語、中国語に通じるリリー英雄の小説を分析、「白人優越」という言葉にホワイト・スプレマシー、「日本」には

ソトからの解釈 新しい表現に

ルーベンといった形で、英語や中国語のルビを頻繁に振っていることなどを挙げ、小説の主人公の心理活動はリビに限りなく近く、一つ一つが越境のステップだとみる。こうした「日本語の異化作用」のプロセスが「日本語と日本文学に新しい血液を注ぎ、活性化を多様化する大きな可能性になっている」と分析した。楊逸について発表したのは名古屋市立大准教授の谷口幸代。芥川賞受賞作「時が流れる朝」の中の「西北風を飲む暮らし」など、中国語の慣用語を作品に導入したと思われる表現が多用されていること注目し、母語とのなれ合いから解放された、新しい表現の地平を

切り開く可能性が秘められている」と述べた。日文化研准教授の郭南燕は、彼ら日本人作家たちについて「日本人とは何か、日本語とは何か、日本文化とは何か」という疑問を、日本社会に突きつけている」と指摘した。発言者の懸念は、日本文化や文学を単なるものにしていくという点で共通していた。シリィンの後半には、外国人作家らが意見交換した。中国出身で仙台市に住む詩人、翻訳家の田原は「もし谷川俊太郎の詩を翻訳しなかったら、日本語で詩を書くことはなかった。日本語を飲むことで、自分の表現空間が広がった」と明かした。昨年「白い紙」で文学界新人賞を受賞したイラン出身、ドバイ在住の作家シリィン・ネザマフィ。助詞の「は」と「が」の使い分けなど「日本語の文法は難しい」としつつも「文法にとらわれず、入り口で止まってしまう。作家は画家と同じようにフリーリングで書く。この線は細いのか太いかを生かして止まってしまう」と全体が崩れる」と実作者ならではの見方を示した。中国出身の作家で弘前大講師の楊天機は「ラジオで文学の朗読を聞くのが好きで、そのソトやリズム、両の間に含まれている感情の表し方が僕の中に残っていた。後に日本語の文章を書くときに影響を与えたのだと思う」と経験を語った。日本語を母語としない人たちに日本語が影響を与え、そこから生まれた日本文学が揺さぶられ、活性化される。そんな構図が浮かび上がった。(敬称略)



楊逸さん

リリー英雄さん

多和田聖子さん

シンポジウム「日本語で書く―文学創作の喜びと活しきみ―」参加者。左から、田原幸代、シリィン・ネザマフィ、ドバイ在住の国際日本文化研究センター

『日本海新聞』2010年3月23日(火)

海 新 報

(第3種郵便物認可)

日本語作家。米プリンス
トンド大教授の政野成一は彼ら
をそう呼び、「日本語を、ソ
ト」から見ることできて、
日本語を異化できる人たち」と
位置付けた。そのような存在
として政野は、在日韓国人
の作家や、ドイツに住み、ド
イツ語と日本語の両方で小説
を書く多和田葉子らも加え
た。

芥川賞作家の楊逸や文学界新人賞を受賞したシリ
ン・ネザマフィラ、日本語を母語としない外国人が
日本語で書いた小説や詩が脚光を浴びている。彼ら
の作品はどのように生まれ、日本文学や日本語とど
うかわかっていくのか。京都市の国際日本文化研究
センター(日文研)が開いたシンポジウム「日本語
で書く—文学創作の喜びと苦しみ」では、その可能
性に注目し、期待する声が上がった。

日本文学を異化、活性化

注目される外国人作家 表現の可能性広がる

う言葉にホワイト・スプレマ
シー、「日本」はルバーン
といった形で、英語や中国語
のルビを頻繁に振っているこ
となどを挙げ、「小説の主人公
の心理活動はルビに限りな
く近く、「いつが起環のステ
ップ」をみる。こうして
「日本語の異化作用」のプロ
セスが「日本語と日本文学に
新しい血液を注入し、活性化
と多様化の大きな可能性にな
っている」と万説した。

● 新しい表現

楊逸について発表したのは
名古屋市長大准教授の谷口幸
代。芥川賞受賞作「時が流む
朝」の中の「西北風を飲む暮
らし」など、中国語の慣用語
を作品に導入したと思われる
表現が多用されていることに
注目し、「母語とのなれ合い
から解き放たれ、新しい表現
の地平を切り開く可能性が秘
められている」と述べた。

日文研准教授の鄭南燕は
彼ら日本語作家たちについて
「日本人は何か、日本語と
は何か、日本文化とは何かと
いう疑問を、日本社会に突き
つけている」と指摘した。
発言者の認識は、「日本社会
の閉鎖性を閉つことも含め、
彼らの存在が日本の文化や文
学を豊かなものになっていると
いう点で共通していた。

● 実作者の見方

シンポの後半には、外国人
作家らが意見交換した。中国
出身で仙台市に住む詩人、翻
訳家の田原は「もし谷川俊太
郎の詩を翻訳しなかったら、
日本語で詩を書くことはなか
った。日本語で詩を書くこと
で、自分の表現空間が広がっ
た」と明かした。
昨年「白い紙」で文学界新
人賞を受賞したイラン出身
ドバイ在住の作家シリン・ネ
ザマフィ、助詞のは「エガ



多和田葉子さん



リービ英雄さん



楊逸さん



シンポジウム「日本語で書く—文学創作の喜びと苦しみ」。(左から) 田原さん、シリン・ネザマフィさん、ボヤンヒン
グさん、楊天職さん=京都市の国際日本文化研究センター

の使い分けなど「日本語の文
法は難しい」としつつも「文
法にとらわれず、入り口で
止まってしまう。作家は画家
と同じようにフィードバックで
書く。この線は細いとか太い
とかを気にして止まってしまう
と、全体が崩れる」と実作
者ならではの見方を示した。
中国出身の作家で弘前大講
師の楊天職は「ラジオで文学
の朗読を聞くのが好きで、そ
のトーンやリズム、声の中に
含まれている感情の表し方が
僕の中に残っていた。後に日

本語の文章を
書くときに影
響を与えたの
だと思つたと
経験を語っ
た。
日本語を母
語としない人
たちに日本語
が影響を与
え、そこから生まれた日本文
学が描き出された日本語と日本語
作品によって日本語と日本語
が描き出され、活性化する
そんな構図が浮かび上がった。
(敬称略)



文化

芥川賞作家の横遊や文学界新人賞を受賞したシリ・ネザマツの、日本語で母親とない外国人が日本語で書いた小説や特約記者としての活躍、彼の作品はどのように生まれ、日本文学や日本語とどう関わっているのか、京都府の国際日本文化研究センター(日交研)が開いたシンポジウム「日本語で書く」文学創作の喜びと苦しみにあわせて、その可能性に注目し、期待する両者があった。



橋本さん



リービ英雄さん



多和田葉子さん

越境する作家の可能性

京都で日文研シンポ

日本語で書く一文学創作の喜びと痛み



シンポジウム「日本語で書く一文学創作の喜びと痛み」。(左から) 田原さん、シリ・ネザマツさん、ホヤンヒンギンさん、橋本さん。京都市の国際日本文化研究センター。

日本文学を異化、活性化

「英雄の小説を分はリーと語りた近」と方解した。析、「日交研」とい、(二)のが境の「言葉」を「イン・ナス」ステッ」た。のめ。フレシ」日」日」化作用」のラボアが、たのは古語市立大准にはルベ」とした「日本語と日本文学に、教授賞」時が準て芥川ルビを賞に授けい、新しい血液を注し、活性化」が求められることなを導き、「小」活性化」を際たの、の中西北を放む。の、の西北を放む。の、の西北を放む。の、の西北を放む。

「日本語で書く」文学創作の喜びと痛み。シリ・ネザマツさん、ホヤンヒンギンさん、橋本さん、田原さん。京都市の国際日本文化研究センター。

シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。

シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。

シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。シリ・ネザマツさんは、日本語で書いた小説が、多くの日本人作家から賞を受賞している。

文化

知りたい！文学

芥川賞作家の楊逸や文学界新人賞を受賞したシリン・ネザマフィ、日本語を母語としない外国人が日本語で書いた小説や詩が脚光を浴びている。彼らの作品はどのように生まれ、日本文学や日本語にどうかかわっていくのか。京都市の国際日本文化研究センター(日文研)が開いたシンポジウム「日本語で書く文学創作の喜びと苦しみ」では、その可能性を注目し、期待する声が上がった。

日本語作家。米ワリいことなを幸げ「小の谷口幸代、芥川賞受賞、シムン大教授の牧野成、説の主人公の心理活動は、作一時が滲心研」の中の一は彼らこそ呼び、リードに限りなく近く、「西北風を飲み暮らした」日本語を、ソトから一つ二つが越境のステッキ、中国語の慣用語を、見ることができ、日本語を異化できる。

日文研シンポジウム

文学を異化し活性化

「人た」と位置付けた。そのような存在として牧野は、在日韓国人の作家や、ドイツに住み、ドイツ語と日本語の両方で小説を書く多和田葉子らに加え、牧野は、英語、日本語、中国語に通じり、日英雄の小説を分析、「白人大きな可能性を帯び、優越」という言葉にホワイト・スプレマシー、日本にはルーベントといった形で、英語や中国語のルビを頻繁に振って、のは名古屋中文准教授、

慣用語で表現

「日本語の異化作用」の表現が多用されている間が広がったと明かす。フロセが「日本語と日」ことに注目し、「母語」と。昨年「白紙」で文学界にデビューしたイラ、ドバイ在住の作家シリン・ネザマフィ、家シリン・ネザマフィ、助詞の「は」と「が」の区別を示した。中国出身の作家で私前大講師の楊天曦は「ラジ」オで文学の朗読を聞くの

シンボの後半には、外国人作家らが意見交換した。中国出身で仙台市に住む詩人、翻訳家の田原は「もし谷川俊太郎の詩を翻訳しなかったら、日本語で詩を書くことはなかった。日本語で詩を書く

本文化とは何かという疑問を、日本社会に突きつけている」と指摘した。発言者の認識は、日本社会の閉鎖性を開くことも含め、彼らの存在が日本文化や文学を豊かなものにしていくという点で共通していた。

実作者の見方



日本語で書く文学創作の喜びと苦しみ。 (左から) 田原さん、シリン・ネザマフィさん、ボヤンビシグさん、楊天曦さん。京都市の国際日本文化研究センター

が好きて、そのトーンやリズム、声の中に含まれている感情の表し方が僕の中に残っていた。後に日本語の文章を豊かき人に影響を与えたのだと思う。日本語を母語としない人たちに日本語が影響を与え、そこから生まれた日本語作品によって日本語と日本文学が繋がら、構図が浮かび上がった。(敬称略)